

令和4年度 第21回 シニア地域活動入門講座(第2回)

日時: 令和4年9月28日(水) 10:00 ~ 12:00

場所: 福祉プラザ 大会議室

内容: 県北の文化遺産を知る

○ 講話: 「長久保赤水を学ぶ」

講師 佐川 春久氏 (長久保赤水顕彰会 会長)

【要旨】 日本地図「伊能図」で知られている伊能忠敏より、42年も早く日本地図「赤水図」を作った学者で、江戸時代の地図の先駆者、長久保赤水(高菀出身)を知る。「赤水図」並びに関連資料は、令和2年9月、国の重要文化財に指定された経緯と重要性について説明があった。赤水図の特徴は、自らが各地を旅し、情報を収集し、数多くの地名、地形、火山、滝、山の形状などを地図に可視化して作られたものである。また、天文学の知識を取り入れ経緯線が記入されている。また、長久保赤水に関する最近の話題についてもお話しを聞くことができた。



講師佐川氏



講演の様子



赤水図を説明する講師



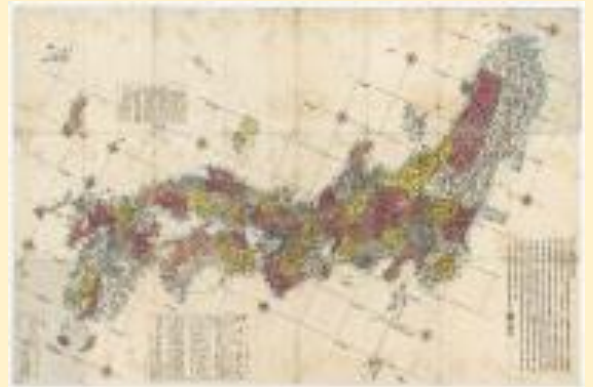
熱心に赤水図を覗く受講者

この講座で、「江戸時代の日本が世界に誇れる偉人の1人」として、県北の偉人、長久保赤水の偉業を知り、「赤水図」の理解を深めることができましたと思います。講話内容を纏めて見ました。

茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（ながくぼ・せきすい、1717～1801年）が、初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬（いのう・ただたか、1745～1818年）より42年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作った。

61歳の時、藩主の住む江戸の水戸藩上屋敷の儒者屋敷に移り、その後、大阪で日本地図、中国地図、世界地図、中国歴史地図帳を刊行し、更に、大日本史地理史の編集などに取り組み、81歳で郷里（赤浜村）に戻り、85歳で亡くなっている。

- 江戸時代の地理学者、長久保赤水の[改正日本輿地路程全図]（高萩市教育委員会提供）

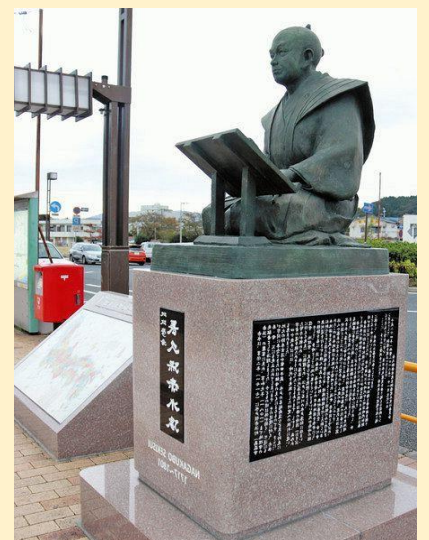


赤水は、高萩市赤浜の農家生まれで、幼い頃に両親を亡くし、親族に育てられ、農業をしながら儒学や天文学、地理学などの勉強に励み、当時の水戸藩主徳川治保に学問を教える侍講を務めた。地図を作り始めたのは35歳ごろ、正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、52歳で初めての地図（原図）を作り、約10年後、天文学の知識を生かして経線と緯線を入れ、赤水図を完成させた。

赤水の地図は、天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも1779年に初版が完成した[改正日本輿地路程全図]（通称・赤水図）は実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。

日本地図で知られているのは伊能忠敬だ。忠敬は日本で初めて測量し、死後の1821年、仕事を引き継いだ弟子たちが[大日本沿海輿地全図]（通称・伊能図）を完成させた。実は、この伊能図ができる42年前の1779年、赤水は[改正日本輿地路程全図]（通称・赤水図）を作り上げた。

- JR高萩駅前にある長久保赤水の像（茨城県高萩市）



赤水図の特徴は、情報の細かさや高い利便性にある。山や河川名など内陸の情報が豊富で、城下町や古戦場などを分かりやすく示す。精密度は伊能図と比べ遜色がなく、目立つ違いは当時の蝦夷地（北海道）が一部しか描かれていない程度だ。驚くことに、日本政府が韓国との領土問題で、江戸時代中期に竹島（当時松島）が日本領として描かれている最古の日本地図として主張し、既に、世間に公表されている。

江戸幕府が伊能図を国家機密として非公開としたのに対し、赤水図は庶民に広く普及。版を重ねるベストセラーとなり、ドイツ人医師シーボルトらの手で海も渡ったとされる

- 「赤水図」のレプリカを持つ長久保赤水顕彰会の佐川春久会長＝茨城県高萩市

